

あの日を忘れない

昨年7月12日の九州北部豪雨から一年を迎えた7月12日、2人が犠牲となり最も被害が大きかった新所区の災害現場で追悼式が行われ、地域住民や村関係者など約80人が参列しました。式では、午前9時に村内全域に流れた防災行政無線のサインと共に黙祷。長野村長が「決

して7月12日を忘れてはなりません。遺族の方にとっては傷が癒えること、そして心の安らぐ日はないでしょう。一日も早い復旧を目指し、村も皆さんと一緒に頑張ってください」とあいさつしました。その後、献花が行われ犠牲者への冥福を祈りました。式には故柳川昌史さんの母、律子さんの姿も。柳川

さんは、「7月12日の災害を決して忘れないでほしい」と、声を詰まらせながら無念の思いを話されました。



献花を行う新所区の皆さん



上段の写真は災害当時、下段は今年7月12日の状況



新所区長 丸野健雄さん

私たちは、昨年の豪雨災害で、多くの人々に支えられていることを実感しました。二次災害の恐れもあるのに、2人の捜索をしていたいただいた役場や消防、自衛隊、警察の皆さん、そしてサポートしていただいた多くの方、ありがとうございました。災害からまだ一年。気持ちにはなりましたが、素晴らしい新所ので、またみんなで笑って過ごせる日がくることを願います。

災害から一年 村の取り組み

昨年7月12日未明から雷を伴った「猛烈な雨」は、一時間雨量108.0ミリを観測（阿蘇乙姫）。1978年からの統計開始以来、観測史上1位の記録を更新しました。12日未明からわずか5時間の間に、平年の梅雨期の約半分の雨量という記録的な大雨となりました。

豪雨を想定した防災訓練実施

5月18日、梅雨期を目前に新所・立野・立野駅地区の住民898人を対象とした避難訓練を行いました。訓練にはおよそ250人の住民が参加。（旧）立野小学校体育館の避難所では、教室を利用して阿蘇広域消防本部南部分署署員の協力で、建物火災を想定した「煙体験」や「水消火器訓練」、非常持ち出し品の紹介などが行われました。

住民避難モデル実証事業

7月12日は、深夜の豪雨と雷の中、住民が避難行動をとることとは、避難の際の被災が懸念される状況でした。そのことを踏

まえ、本年度から県が進める「住民避難モデル実証事業」に取り組み、「日没前の明るいうち」に予防的避難を促し、早めの避難を心がけます。また、住民の防災意識「自助」「共助」の啓発を推進し、県内全域に取り組みを広めます。

学校教育などにおける

防災知識の普及

東日本大震災を踏まえ、防災教育についても推進しています。中学校で地震などを想定した防災訓練を実施。座学では、熊本地方気象台など外部の専門家などの協力を得、災害時の「自助」「共助」を身に付けることや、もしもの場合に備えて避難所の場所の確認をしていきます。



防災担当者による久木野中学校での防災教育